

論 題 街なみ環境整備事業に対する住民意識
—みなかみ町湯原地区を対象として—

学籍番号 20718028

氏名 中島 のぞみ

指導者 薬袋 奈美子 専任講師

1、はじめに

1-1 研究の背景と目的

近年、日本のまちづくりにおいて従来の行政による一方的な都市基盤の再整備によるものではなく、行政と住民、専門家が一体となって行う「協働型まちづくり」が重要だと考えられている。

そんな中「街なみ環境整備事業(以下街環)」は個人の住宅への工事費用も補助対象となっていることや基本的に住民間で締結される「街づくり協定」に沿って事業が行われるため住民主体の街づくりを促す事業であるとされている。

しかし街環対象地区の住民意識に関する研究はされていない。このような背景から本研究では街環事業に関する住民意識を明らかにしていく。

1-2 調査方法

本研究では緑の現況調査と住民へのヒアリングを行った。緑の現況調査では対象地区を管理者別に314地区に分け、樹木・低木・花壇・プランター・雑草等の11項目に関して有無を調べたⁱ。ヒアリングは32名に街環の認知度、自宅の管理状況、ヒアリング対象者の内訳街づくり活動への思い等に質問を行ったⁱⁱ。

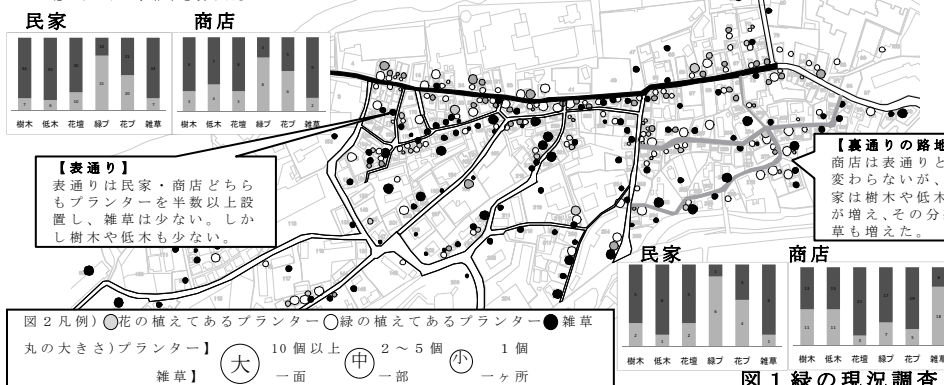
2、湯原地区概要

対象地の群馬県みなかみ町湯原地区は、近年経済の停滞や温泉旅行客の嗜好の変化により観光客は激減し、現在は廃墟や空き地も目立ち地区の人口は1000人を切っている温泉街である。

平成17年より街環施行のために必要な「街なみ協定」を作るため「街づくり協議会」を設置し、平成22年3月に協定が締結され、同年11月に街環は正式に施行となった。

協定内容は「おもてなしの庭づくり」をテーマに緑で街に統一感を作り出すもので、公共事業への補助が多い従来の街環よりも更に住民の積極的な参加が必要だと考えられるⁱⁱⁱ。

*グラフでは調査を行った11項目の内、違いが顕著に表れた樹木、低木、花壇、緑プランター、花プランター、雑草を表した。



3 湯原地区の緑の現状と緑に対する意識

3-1 通り別の特性

踏査による緑の現況調査の結果を抜粋し図1に示す。積極的な緑による装飾の一種であるプランターは表通り沿いに多く、自宅を飾る意識の強さの表れと捉えられる。表通りから離れるにつれて雑草地や低木による植栽が増えプランターは減る。豊かな緑の表出はあるが、飾る意識が低くなっていると捉えられる。

3-2 建物用途別の特性

湯原地区の主な建物用途である民家と商店の通りごとの緑の表出の割合をグラフにし図1に示した。商店はどの通りでもプランターが多くグラフの形が同じで、立地に関係なく手入れされていた。しかし民家は表通りに限り商店と同じグラフの形で手入れされていたが、他は通りごとに異なり統一性はなく用途での傾向は見られなかった。

3-3 花植え活動の現状

現在湯原地区では図2のような花植え活動がある。役場の農政課から苗の援助を受けている任意団体以外でもホテルの従業員の1人が友人1名と黄色コスモスを植える活動を積極的に行っている。種を知り合いやホテルで配ったことで広まり、現在は秋になると湯原地区の至る所で黄色コスモスがみられる。当人達が黄色コスモスを植えている場所も公共駐車場等を含め年々増えている^{iv}。

3-4 自宅の緑を置く理由

緑のある建物の利用者に自宅を手入れする理由を6項目から選択してもらった所、「花を育てるのが好きだから」(17人)が多く、非自営業者は全員選択した。一方で自営業者は「街並みを賑やかに」(11人)や「集客力アップ」(10人)との両方を選択した人も多い。自営業者は街並みに貢献しようとする意識があるが、非自営業者は「好きだから」という理由がなければ緑を置く必要性がない。自営業者と非自営業者の間に緑の設置や街並み貢献への責任感の意識の差があると言える。

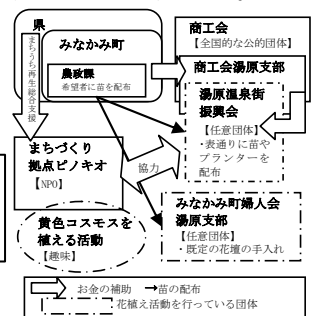


図2 湯原地区の花植え活動を行っている団体の関係図

図1 緑の現況調査

4、住民の街環の取組に対する意識の変化

4-1 意識の変化

6年間の街環事業準備期間を通して意識の変化があったのかという問いに対して32名中27名は、「変わらない」「街なみを統一したいという気持ちは昔からある」等の否定的な意見であった。しかし少数ではあるが6名は意識の変化を感じていた。(表2)

表2 意識の変化

意識の変化	
街の変化を感じた	・自分にできる範囲で出来たらいいなと思うようになった。 ・本当に少しずつだけ変わって来ていると思う。 ・街が動いているから、自分もまずはお店の中を綺麗にしようと思 い棚の中の整理を始めた。 ・周りはプランターを置いているし、少しは街並みに貢献しようか なと思うようになった。
外部の人に対して	・お客さんの目線を持っている外の人が必要と思った。 ・人に相談するのが楽になった。相談出来る他の人ができた。

今後のまちづくり活動に対して積極的に参加すると答えたのは1人のみだったが、「自店を頑張る」(4人)や「出来る限り参加したい」(6人)のように自分の出来る範囲で各々の方法で街の活性化に貢献しようとする意志が確認できた。

しかし「出来る限り参加したい」と答えた人からは気持ちはあるが参加しづらいという意見も聞かれ、意識の変化はあってもまちづくり活動への参加には直結しづらい現状も分かった。(表3)

表3 まちづくり活動に参加しづらい理由

自分に対して	・今まで参加していなかった自分のお店は汚いので参加しづらい。 ・店が1人なのでお店を空けられないから参加できない
役場に対して	・参加したいけれど、窓口が誰なのか分からない。役場とのキャッチ ボールが取れていない。 ・参加したい気持ちはあるが何をしたらいいかわからない

4-2 花植え活動に対する積極的な意見

ヒアリングでは花植え活動に対する積極的な意見も聞かれた。(表4)黄色コスモスを植える活動の他にも湯原地区に多くある空き地や放置されている花壇等を実際に許可をとり利用している人や今後植えたいと考えている人もいた。緑を積極的に植えたいと望んでいる人はいる。

しかしそれらの人は街環を利用しないのかと尋ねると補助金によって生じる責任がでることに抵抗感を感じており、あくまでも趣味の範囲で気軽にやっていきたいと答えていた。

表4 花植え活動に積極的な意見

空き地・放置されている土地の利用に対して	・お店前の花壇(公共物)は今も放置されている。やってもいいなら 花を植えたいが誰に言えばいいのか分からない。 ・街を綺麗にしたいと思うけど他人の土地を勝手ににはできない。 ・空き地があっても揉め事を避けて貸さない人が多い。 ・家の前のホテルの寮の土地に許可をとって、花を植えている。
補助金によって生じる責任に対して	・補助金を出して貰ってまで直したいとは思わない ・(花畑を作りたいとは思うけど)お金を出して貰ったらしっかり管理し なくちゃいけないから、助成金はいらない。

5、住民の街なみ環境整備事業への意識

5-1 立地による環境改善への意識の違い

ヒアリングから住民の立地に対する強い意識が見られた。(表5)表通りでは街並み形成者の1人として街並みを賑やかにすることに少しでも貢献したいという思いが見られる。裏通りは街並みではないから飾る必要はないという思いが見られ、街環を利用しないのは街並みを整備するための街環を利用するにはふさわしくないからとの意見が裏通り沿いに住む8人中4人から聞かれた。立地条件が街環利用へ大きく影響していることがわかる。

表5 立地に対する意見

	表通り	裏通り
自営業者	・表に住んでいる者としてお店は絶対 にあけなきゃという意地がある。 ・街が少しでも賑やかになるように8時 半くらいまで店を空けるようにしてい	・外にアピールするほどのお店ではない
非自営業者	・特に立地条件に関する意識は聞か れなかった	・裏通りだからわざわざお金を出してもらうのは 申し訳ない。 ・表通りから見える所は綺麗にしようという思う。

5-2 街環の認知度と利用に関する意識

街環は住民全体に調印を求めたにも関わらず内容を把握しているのは32人中23人に留まった。また街環よりも協定の認知度が低い人が11名おり、事業自体は知っていてもどう変えていけば良いか知らない人が多いことが分かる。認知度に関して場所による差は特に見られなかった。

また街環を活用したいと答えた7人の内6人が表通りの自営業者で、立地条件の影響が表れている。また「変えたかったが、協定に合わせて変えようと待っていた」という積極的な人も1人いた。

5-3 街なみ協定への意見

協定を見てもらいどの項目であれば実践できるかと聞いた所、「花・緑・木」の項目は25人中13人が選んでおり、また19人が緑を何かしら置いており、住民にとって実行しやすい項目である事がわかる。しかし他の項目^{vi}は全て半数にも満たず住民は実行しづらいと感じていた。

5、まとめ

表通りと裏通り、自営業者と非自営業者の意識の差が大きく、自己が街並み形成者の1人であるという意識の有無が住民の街環利用に大きな影響を与えている事が分かった。

街環本来の事業の目標は「ゆとりと潤いのある住宅地の形成」であるが、住民には街並み修景事業であるという認識が強く、街並み形成者である意識が弱い住民にとっては利用しづらく、利点である個人住宅の工事への補助へ繋がりにくい。

また施行一年目の現段階では住民が積極的にまちづくり活動に参加するという状態ではなく、改善意欲が高まった人もいたが、協働型まちづくりが行われているとは言い難い。

役場やまちづくり協議会は街環利用を促すだけでなく、現在動きがみられる空き地利用や黄色コスモスの活動等を通し参加しやすさを重視し、表通りや自営業者だけではなく住民全体にアプローチしていくことが必要である。

注釈

ⁱ 緑の現況調査は2010年9月20～22日に目視により行った。

ⁱⁱ ヒアリングは2010年11月22～24日と29～30日の4日間行った。

ⁱⁱⁱ 「全国事業地区の実態からみた街なみ環境整備事業の実態 愛知県における防災のまちづくりの必要地区調査およびぼうさいのまちづくりの全国先進事例調査②」中部大学佐藤圭二を参考に全国の事例と湯原地区の協定内容を比較した。

^{iv} 2010年9月21日に活動を行っている2名にヒアリングを行った。林まゆみらの「ガーデニング愛好者にみられる緑豊かなまちづくりの活動とその促進要因」第14回環境情報科学論文集(2000)の「ガーデニングの目的因子」を参考に「花を育てるのが好きだから」「集客力アップのため」「街並みを賑やかにするため」「庭やベランダの美化」「知人友人との交流のため」「心の癒しのため」の6項目を選択した。

^v 「街なみ協定」全部で18項目あり、「サインに節度と手づくり感を与える」「店先におもてなしの空間を確保する」などがある。

主な参考文献
1) 土井美香子「住民参加型まちづくりにおける協働のプロセスに関する研究」日本建築学会中国支部研究報告集第27巻 平成16年3月